

「令和4年度 神奈川県立高等学校及び中等教育学校 生徒による授業評価」の結果について

各学校においては、この結果を活用して組織的な授業改善を一層推進し、「確かな学力」の育成に取り組んでまいります。

(1) 概要

目的	生徒の確かな学力を育成するため、各学校における教員の指導力の向上や授業の改善を図るとともに、生徒自らが学習への取組を見つめ直す機会とする。
対象	全県立高等学校及び中等教育学校（140校、159課程）の全生徒（約11.5万人）
調査期日	第1回は夏季休業前、第2回は冬季休業前に各学校が設定した日
内容・方法	各学校において、授業の在り方や学習の状況について、「かなり当てはまる」「ほぼ当てはまる」「あまり当てはまらない」「ほとんど当てはまらない」の4段階の評価によるアンケート方式で実施した。 結果を集計・分析した上で、校内研修等を実施し、結果を生徒・保護者・学校運営協議会等に公表する。

(2) 主な結果 <共通教科における「かなり当てはまる」と「ほぼ当てはまる」の合計の割合>

大項目	共通小項目	令和3年度	令和4年度
授業の在り方について	毎時間の授業や単元（内容のまとめ）のはじめに学習のねらいを示したり、毎時間の授業や単元の学習のあとに学習したことを振り返ったりする機会がある	86.8%	85.7%
	単元（内容のまとめ）の学習の中で、他者の考えを知り、自らの考えを広げ深める機会がある	84.2%	84.4%
	単元（内容のまとめ）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考える場面がある	87.1%	87.0%
学習の状況について	授業の中で身に付いたことや、できるようになったことを実感することができた	86.9%	86.3%
	他者の考えを知ることにより、新たな考え方を知るなど、自らの考えを広げ深めることができた	83.8%	84.1%
	授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた	86.2%	85.8%
	授業で学んだことをそれまでに学んだことと関連付けて理解することができた	87.7%	87.3%

- 肯定的な回答の割合が、昨年度に引き続き全ての質問項目で80%を超えている。このことから、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に、各学校が取り組んできた成果が表れていると考えられる。
- 肯定的な回答の割合が最も高いのは、昨年度に引き続き、「授業で学んだことをそれまでに学んだことと関連付けて理解することができた」である。このことから、知識を相互に関連付けてより深く理解することに向かう過程を重視した学習の充実が図られていると考えられる。

<課題の改善の方向性>

令和3年度と比較すると、「毎時間の授業や単元（内容のまとめ）のはじめに学習のねらいを示したり、毎時間の授業や単元の学習のあとに学習したことを振り返ったりする機会がある」の質問項目における肯定的な回答の割合が、他の項目に比べて減少した。

単元（題材）の目標に基づく「見通しと振り返り」を適切に設定し、生徒の主体的な学びを実現することができるよう、各学校における授業改善の取組の状況や課題を把握し各学校の支援に活用するとともに、授業づくりにおける重要な点を各学校に周知することが必要である。

授業づくりのポイント

「主体的・対話的で深い学び」の実現と学習評価の充実に向けて

➤指導と評価の計画

□「単元（題材）の目標」と「単元（題材）の評価規準」が「学習指導要領」に基づき設定されている。

現在行っている評価は、学習指導要領に示された目標に基づく「目標に準拠した評価」であり、「単元（題材）の目標」を、その単元（題材）の学習を通して「身に付けさせたい力」として設定することが必要です。「単元（題材）の目標」＝「身に付けさせたい力」を、学力の三要素（観点と連動）ごとに設定しておくことで、評価計画も立てやすくなります。「単元の評価規準」は、「単元の目標」が実現された姿であり、生徒の実情や扱う教材等に応じて、観点ごとに設定します。

□「単元（題材）の目標」「単元（題材）の評価規準」を実現するための学習活動が設定されている。

授業を構想する際には、「何をさせるか」というところから始まることが多いのではないかと思います。大事なのは「何のために」という視点です。学習活動は「単元（題材）の目標」の実現＝身に付けさせたい力の育成に役立つものである必要があります。「思考・判断・表現」の観点を測るための活動を、単元（題材）の中心に据えながら、「知識・技能」「主体的に学習に取り組む態度」を測るための活動を、設定するようにするとよいでしょう。

□指導の計画だけでなく評価の計画が示されている（どの場面でどの観点をどのように評価するか）。

「単元（題材）の評価規準」として示した姿＝目標の実現状況を、設定した学習過程の中でどのように評価するか、活動に沿った評価方法を考えます。なお、評価は、必ずしも、授業中に行わなければならないものではないことに留意してください（例えば、ワークシートを回収し、その記述を分析し評価することも有効です）。また、学習過程の中で見ていくべき資質・能力と、定期試験でも測れる資質・能力を事前に峻別し、評価の計画を立てていくことが必要になりますので、定期試験の在り方についても、改めて検討していく必要があるのでしよう。

➤授業の中で

1 単位時間内ではなく、「単元（題材）」の中に、次のような要素が取り入れられていることが重要です。

□「指導と評価の計画」に設定した目標（身に付けさせたい資質・能力）を生徒自身が認識する場面がある。

□生徒が見通し（活動の見通しではなく能力ベースの見通し）をもって授業を受けている。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価とも関係しますが、生徒の資質・能力を育成するには、生徒自身が授業（単元や題材）の目標を理解していることが重要になります。生徒が自己調整をしながら学習を進めるためには、まず、目標をしっかりと認識することが必要です。生徒の活動としての「見通し」と「振り返り」については、定着してきましたが、重要なことは、「見通し」と「振り返り」が、「何をやるか」という活動ベースのものに終わらないということです。もちろん、ユニバーサルデザインの観点からは、「活動への見通し」が立っているということは大切なポイントですが、「主体的に学習に取り組む態度」を養うという観点からは、能力ベースの「見通し」と「振り返り」が欠かせません。そのためには、まず単元（題材）のはじまりの部分において、生徒が目標を認識するような工夫を取り入れましょう。単元（題材）の学習の後の自分が想像できるようにするとよいでしょう。

□学習活動の目的・意義が明確である。

授業の計画を立てる際に、「生徒に何をさせようか」というところからスタートしていませんか？生徒が学習に前向きに取り組むためには、生徒の興味関心をひくような学習活動であるということは大切です。しかし、それが、その単元（題材）の目標を実現することに資するものでなければ、せっかくの工夫が生かされないことになってしまいます。学習活動は、目標とした力を育むためのものになっているかという視点に基づいて設定するとよいでしょう。

□知識の確実な定着を図るための工夫がなされている。

定期試験前の学習などだけでなく、授業中にも、知識を身に付ける意欲を高める工夫が生徒の実状に応じてなされていることが重要ですが、これは必ずしも授業中に知識の定着を図る活動を行うということではありません。知識は単体で持っているだけでなく、個々の知識を結び付け、活用していくことで、有益なものとなります。知識が生きて働くものとなるような、生徒が「知識はあったほうが良い」「知識を身に付けて使いたい」と思えるような動機付けとなるようにすることが大切です。そのためには、「知識・技能」に関する学習活動と「思考・判断・表現」に関する学習活動との関連付けを計画的に行うことが必要です。例えば、知識を問うプリント学習であっても、プリントの最後に、知識を結び付けて自分の言葉で説明させるような問をつけるだけでも、知識の確実な定着につながります。

- 生徒自身が（知識や技能を活用し）「自分で考え、実行する」ための課題や教材の工夫がなされている。
- 生徒自身が（知識や技能を活用し）「自分で考え、実行する」ための場や時間が確保されている。
- 特定の生徒に対する「発問—指名—回答—説明」というサイクルだけで終わってしまうことなく、全員の生徒が思考できる工夫がなされている。
- 生徒自身が自らの「思考の流れ」を記録するための工夫がなされている。

「思考・判断・表現」の目標は、生徒が課題に対して、主体的に向き合うことにより実現されるものです。そのためには、生徒の思考を促す「問い」の設定が必要です。教材研究は、その内容を確認することだけではなく、どのような課題設定を行い、どのように生徒に問いかけるか、ということを含味することでもあります。また、「思考・判断・表現」に関する問いかけは、特定の、例えば指名した生徒だけでなく、すべての生徒が考え、それを表現できるように、場と時間を確保しなければなりません。単元（題材）の中心となる課題や問いについては、口頭のやり取りではなく、ワークシートやノートに、思考の流れや、試行錯誤を行った痕跡が残るようにするとよいでしょう。そのような試行錯誤の記録は、生徒の自己調整の記録でもあり、「思考・判断・表現」の評価だけでなく、「主体的に学習に取り組む態度」の評価にも使うことができます。

- 自分で考えたことを、広げたり深めたりするための工夫（対話的な学び）がなされている。

「対話的な学び」は重要ですが、対話すること自体が目的ではありません。対話を通して、自分とは異なる考え、視点や価値観に触れることで、自分の考えを広げ深めることが目的です。対話的な活動を取り入れる際には、何のために行うのか、ということ意識する必要がありますし、目標（身に付けさせたい力）の実現に資するものであることが重要です。「隣の人と話し合っ」て」という活動も、軽重をつけ、重要な問いの際には、対話の前後の変化が記録に残るようにすることも大切な工夫です。ワークシートやノートに考えを記載させ、変化を意識させるようにするとよいでしょう。

グループ活動を行う際には、合意形成を行うためのクローズな話し合いなのか、他者の意見を聴き合うオープンな話し合いなのか、明らかにしたうえで行うことが重要になります（オープンな話し合いの時には、発表は無用です。発表させることで、せっかく広がった意見を狭めてしまうことがあります。グループ活動→発表の形態が全てではありません）。目標や目的に応じた話し合いの形式を設定するようにしましょう。

また、「対話的な学び」の一つの形態として、「教え合い」の活動がありますが、教え合いはどうしても、一方向の活動になりがちです。教え合いも有効な活動ではありますが、それにとどまらず、一つの課題を何人かで協同し解決するという対話も必要です。そのような課題や問いかけも、ぜひ取り入れるようにしてください。

- その教科の本質に迫る学びになっている。

「深い学び」は「難しい学び」ではありません。英訳すると authentic（真正な）とされるように、その教科ならではの本質的な学びであり、いわゆる「レベル」とは視点が異なります。その教科を学ぶことによって、生徒たちが将来にわたって得られるものは何か、知識だけではなく、見方や考え方、こだわらべき点はどこにあるのか等について、授業者が十分に検討し、それを具現化するような授業づくりを行うようにするとよいでしょう。小、中、高と学びの抽象度は上がっていき、概念的になっていきます。すぐに生活に役立つということは少なくなってしまうますが、その教科の学びが生徒の血肉となって、人生を支えていけるように、中長期的な視点で授業の在り方考えることも必要です。

毎単元（題材）は難しいと思いますが、生徒自身が「課題設定」や「解決方法の検討」を行うような、その教科固有の「探究的な学び」についても、計画的に取り入れるようにしましょう。

- 生徒自身が「自らの学びを振り返る（メタ認知）」ための課題や教材の工夫がなされている。
- 生徒自身が「自らの学びを振り返る」ための場や時間が確保されている。

「見直し」と対になるのが「振り返り」です。先にも述べたように、「見直し」と「振り返り」は、目標として設定した力が身に付いたかを、生徒自身が分析的にとらえるための活動です。効果的に「振り返り」を行うには、目標を意識させるということが重要です。単に「どうでしたか」「振り返ってみましょう」という投げかけをしても、焦点が絞られず、「頑張った」「足りなかった」「面白かった」というような漠然とした振り返りになってしまいます。生徒たちの分析の視点をサポートするような投げかけを、目標に則った形で行うとよいでしょう。その際、自己評価や相互評価を取り入れることが多いと思いますが、自己評価も相互評価も学習活動です。評価はあくまでも教員が行うものですので、自己評価や相互評価の結果を教員が評価します。自己評価や相互評価については、ABCや123という段階評価を行っていることが多いようですが、記述による評価をとり入れることで、生徒が自身の学びを分析的に捉えやすくなりますし、評価者として、生徒の学習の実現状況が測りやすくなります。段階評価を行う際に、その根拠を文章で説明させる等の活動を取り入れるとよいでしょう。